

三浦梅園と

ケインズに教へられて

白井 淳三郎

「雇用・利子及び貨幣の一般理論」の序文の最後に、ケインズは次のように書いている。……「本書を作り上げること、著者にとっては長い間の逃れようとする斗い——思惟と表現との習慣的な方式から逃れようとする斗い——であった。……著者がここに苦心して表明した諸観念は、きわめて簡単であつて、容易に理解される筈である。困難は、新しい観念にあるのではなく、大部分のわれわれと同じような教養を受けた人々の心の隅々にまでひろがっている古い観念からの脱却にある。一九三五年十二月 J・M・ケインズ^①」

古い観念が習気となつて、新しい発想の展開にブレーキをかけていることは、昔も今も変わらないのではあるまいか。二百年の昔、三浦梅園は、多賀墨卿君への書簡の中で、次のよ

うな例を上げている。

「人生まれて嬰孩エイガイの時（みどりごのこと）、猶天然の真を失せず、その十一人は浄門（浄土宗）の僧となし、一人は日蓮下の僧となし、各々の師に従つて学ぶこと十年、帰り会して各所見を呈せんに、十年の習気氷炭相反し、死すといへども、その守をかへず。嬰孩エイガイ天然チンネンの真をもとふとも、いかでか再度かへる事を得ん。^②……」

三浦梅園よりも、百年さかのほつた一六二八年、ウイリアム・ハーヴェーは、この著書の序文において、全く同じような主張を繰りかえしている。（心臓と血液の運動に関する解剖学的論文）

「このきわめて広大なすばらしい自然の王国を目の前にしながら、他人の報告を軽々しく信じ、それから粗雑な問題をつくり出し、それに基づいて、こみ入つた揚足とりの論争をはじめたりするのは、恥づべきことであらう。自然そのものに問ひかけるべきである。」もう一度、梅園にもどつてみると……「天地達観の位には、聖人と称し仏陀と号するも、もとより人なれば、畢竟わが講求討論の友にして、師とするものは天地なり。^③……」「天地をしるは我私の意を入れず、

あるままに天地に従いて、天地を師とするにしくはなく候。

されども天地物いはず、人々のおもふ様に見らるる物にして正す^{タテ}処の人、千差万別に候へば、口呑を以て争はんには、盡期なく、自得にしくはなく候。^④「更に梅園の帰山録という長崎旅行記の中には……「道小ナルニ非ズ。人コレヲ小ニスルナリ。世ノ学者、門戸ヲ立テ区域ヲ画スルヨリ、大ニ於テハ儒トモ仏トモ神トモ分レ、仏中ニハ顯ト云、密ト云、禪ト云、浄土ト云、一向ト云、法華トイウ。儒ニハ朱子、王陽明、徂徠、仁齋ナト枝又枝ヲ生ジ、派又派ヲ分ツ。広キ天地ノ誰惜シム者世界ヲヘソキリテ人ニ与ウ。」^⑤

西洋ノ学ハ能クモノノ理ヲ推シ極メ、物ノ性ヲ尽ス。能ク道ヲ小ニセズ。物ヲ天地ノ如ク入レ、能ク天地ノ条理ヲ知り、是非ヲ大同上ニ分チ、各好尚ヲ海ノ如ク容ルベシ。是乃^{スナハチ}天地ヲ師トスルナリ。^⑥」

歳末のNHKテレビに生前の湯川秀樹博士が発言されるのを見た。極めて梅園と類似したことを述べられるので驚いた。「学問をすれば、するほど、人間は偏見のかたまりになるのです。だから、その立脚点から大きく飛躍するためには、どうしても、それまで身につけた偏見を一掃することが

必要です。」

戦後の日本が、世界でも類のない経済発展をとげたのも、戦前の習気や垢を農地改革と共に一掃したからではないか。また基礎的な品質管理を徹底して実行したのも日本の企業であった。これら地道な努力が世界有数の国際競争力を養いそだてたのであろう。

併しながら、この三十六年間、無意識のうちに様々な習気や先入観が組織や制度の中に垢のように、付着し、動脈硬化をおこしている。これらの整理・一掃ができるか、できないか、ここに日本の運命がかかっている。芭蕉翁の如く古人の求めたる所を求めたいものである。

註 ①『雇傭・利子及び貨幣の一般理論』J M ケイズ 著 塩野谷九

十九訳 東洋経済新報社21ページ

②岩波文庫『三浦梅園集』15ページ6行目

③右に同じ 16ページ1行目

④右に同じ 29ページ7行目

⑤『梅園全集』上巻 千百二ページ下段10行目

⑥右に同じ 千百四ページ2行目

(梅園学会々員